

基生研30年を振り返って

基礎生物学研究所名誉技官
服 部 宏 之

はじめに

1979(昭和54)年9月、私は名古屋大学より基生研に赴任した。生物科学研究機構基礎生物学研究所の創設の2年後であった。そして2004(平成16)年3月には24年7ヶ月をもって、多くの皆さんに支えられて無事職務を終え退官した。この年が国立の機関としては最後の年で、以後「独立行政法人(大学共同利用機関法人)」となって、大幅な機構改革が進められた。国立天文台、核融合研究所を加えた自然科学研究機構の基礎生物学研究所として、生理学研究所、分子科学研究所と共に現在に至っている。退官の3年前に、独立行政法人に移行するための制度改革に関わる検討が、大学共同利用機関技術職員会議で始まり、岡崎の3研究所を中心に、遺伝学研究所、核融合研究所、高エネルギー研究機構の技官の代表の方々と400名の技術職員の処遇等に関する熱心な検討会がはじまり、国立大学の技官をも含めてそのあり方について口角泡を飛ばして議論したことが懐かしい。

退官した翌年の2005(平成17)年9月、突然基生研の長谷部光泰教授から、科学技術振興機構(JST)の戦略的創造研究推進事業(ERATO)に選考され、プロジェクトを立ち上げるので手伝ってほしいとお声がかかり、技術参事という大役をお引き受けすることとなった。その研究実施場所が巡り巡って基生研の3階のエリアを借用することになり、再び基生研に戻ることにしたのは何かの縁であろうか。昔の仕事仲間が大いに助けられ、この1年プロジェクト研究もすこしづつ軌道に乗り出した。今回30周年の原稿の依頼をいただけたことに感謝しつつ今更私が何を書くべきか、しかし私だから書けることはないか等と思いめぐらし、悩むこととなった。

振り返ると、20数年前のいろいろの想いが走馬灯のように思い出され、なかなか筆が進まない。創設期の研究所の「黎明期」ともいえるある種のオーラが漂っていた時期について書きたいが、「基生研の10年」「基生研の10～20年」の記念誌とオーバーラップは免れない。しかしそこからスタートした思い出からまず書き留めておきたい。

<基生研の創設期の出会い>

私が赴任した昭和54年9月、基生研実験棟の2/3が4月に完成したばかりで、同時に赴任した古川さん(現技術課長)と机を並べて3階の353室に数ヶ月間同居した。この時期は、既に分子研が岡崎の先住民として研究活動を立ち上げていて、以後、岡崎市民には、岡崎機構の3研究所は「分子研」としてインプットされていた。その後共通施設棟、生理学研究所、基生研1/3の建物工事が着々と進められたが、周辺は未舗装のままで、雨が降れば泥海となり、研究所の入口で上履きに履き替える習

慣となった。

当時基生研は、所長が桑原万寿太郎先生、基生研の創設の中心メンバーの金谷晴夫先生（第2代所長）、神谷宣郎先生、太田行人先生、鈴木義昭先生、古谷雅樹先生（客員）ら教科書でも名が知られた方ばかりで、助教授には、黒岩常祥先生（東大名誉教授）、長浜嘉孝先生（現基生研教授）、広瀬進先生（現遺伝研教授）、助手に岸本健雄先生（現東工大教授）、白井浩子先生（現岡山大学助教授）、近藤孝雄先生（現名大教授）、石浦正寛先生（現名大教授）、辻本賀英先生（現阪大教授）、津田正明先生（現富山医科薬科大教授）、山本興太郎先生（現北大教授）、渡辺正勝先生（現総研大教授）らがおり、熱気のようなものが醸し出されていた。

（私の記憶違いもあり、抜けている方々にはお詫び致します）

<分析室のこと>

私が、生理研との共通施設の分析室の技術係長として名古屋から赴任したときは、まだ分析室の建物もない状態で、その設計におわれ、建築課の方や、業者の方が入れ替わりで出入りされ、他方で各種分析機器の導入すすめるという、目の回るような毎日でした。当時としては日本で最高クラスの超伝導核磁気共鳴装置（NMR 360MHz）が導入された直後で、この装置だけで1億2千万と聞いて驚いた。まだ70MHzの電磁石の装置が全盛だったところで、当時がいかに予算面でも恵まれた研究所であったかが伺い知れる。その後、各種最新鋭機器の選定・導入がはじまり緊張の連続でした。翌年赴任した梶浦（小林）弘子さん（現技術課班長）には色々助けてもらいました。数年後には小島久さん（現名大アイソトープセンター主任）、壁谷さん（現大隅研）、大澤さん（現山森研）、牧野さん等優秀なスタッフに恵まれ、現在は、森さん（係長）に引き継がれている。

<所長との思い出>

私は、初代の桑原万寿太郎、金谷晴夫、岡田節人、竹内郁夫、毛利秀雄の各所長、そしてこの3月に退任された勝木所長迄、歴代全所長と関わらせていただくこととなった。金谷先生は、基生研創設に関わられた所長であるが、わざわざ名古屋迄足を運んでいただき、岡崎に呼んでもらえたことは、私の人生の転機でもあり忘れがたい。いつもお酒を飲みながら、基生研を自分の子供のように愛し、若い研究者には議論を吹かけ楽しんでおられた先生が、所長就任直後に志半ばで急逝されたことは惜しまれる。金谷先生のお人柄は、岸本健雄（現東工大教授）氏らの「ロマンチックな科学者」を読んでいたきたい。急遽3代目の所長に就任された岡田先生は独特の関西弁とともに、私を含め多くの所員とテニスをたのしめた所長としても思い出深い。4代目の竹内所長から技術課長を拝命したが、あのあたたかい励ましのお言葉がうれしかった。毛利所長とは6年間の永きに亘るお付き合いをさせていただき、後述の事件との関わりを含めた忘れがたい所長であった。勝木所長には、奥様共々お世話になり短いにもかかわらず印象深い先生であった。私の退官時には、岡機構最後の「名誉技官」という称号までいただき深く感謝している。

法人化という新しい体制のもとで、基生研が世界の生物学の研究拠点としてますますの発展をすることを心から願ってやまない。